山下澄人さんがMondaというウェブサイトでやっている質問コーナーが本になってリリースされた。タイトルは『おれに聞くの？』。ジャケの背景は薄いブルーと薄いグリーンのあいだくらいの色、たぶん「パステルカラー」というやつ。雑貨屋で売ってる手帳とか、しゃれた布みたいな雰囲気だ。何も知らずに本屋へ行ったらこれが山下さんの新刊だとは気がつかないかもしれない。帯には山下さんの写真、どちらかといえばメンチ切ってる人のほうに近い真顔なのに、なんと、ふきだしをつけられてしゃべらされている！ 肩に猫まで乗せられて！ 小説ではない本、というだけでいきなりこんなことになるなんて怖い。大変な仕事だ。

帯の山下さんは「読むと悩みが消えます もしくは、増えます」と言わされているけど、この本のどこを探してもこういう発言は出てこない。177ページに「大丈夫、苦悩は歳をとっても続きます、なんなら増します」とは書いてある。でも、読むと増えるとは言ってない。似てるからいっか、とかそういう問題じゃない。さらにサブタイトルには「異端文学者による人生相談」とあるけど、ここで繰り広げられてることは「人生相談」には見えない。わたしたちのこの《生きている》は固形物じゃなくて動きそのもので、質問してる人も山下さんも読んでるわたしも皆その動きに含まれている糸の一本で、動きから切り離されたところに身を置いてこの《生きている》を眺めながらああだこうだ語ることはできないし、山下さんはそれができないとわかってる人だから、まえがきでいきなり「わたしは人生相談などというつもりはまったくなかった」とか言い出す。笑

ジャケ、帯、サブタイトルなど、少しでもキャッチーに…ということでほどこされた工夫の数々が一発でふっとぶくらい、まえがきの時点で書き手のチャーム丸出し。もうここでわたしは嬉しくなってしまう。

ほとんどの質問文には「これってこうだと思うのですが、」とか「これってこうじゃないですか、」という前提が含まれていて、それはわりとガチガチにゆるぎない。で、ゆるぎない前提にくっつける形で「山下さんはどう思いますか？」とか「でも私はそれができません。どうしたらいいですか？」みたいな質問がくるんだけど、山下さんはまずその「これってこうだと思うのですが、」がわからないし、わからないのにわかったことにしたりしない。質問した人が当然のこ